

参 考 資 料

○ 佐州山出金銀江戸上納高

○ 人物略記

○ 講演リスト

○佐州山出金銀江戸上納高

(単位：貫)

年次	銀・灰吹銀	年次	銀・灰吹銀	年次	銀・灰吹銀	年次	銀・灰吹銀	年次	銀・灰吹銀
1613慶長18	1,819	1656明暦2	959	1699元禄12	1,355	1742寛保2	165	1785天明5	475
14 19	1,659	57 3	1,051	1700 13	1,227	43 3	195	86 6	315
15元和1	2,578	58万治1	1,355	01 14	1,285	44延享1	160	87 7	423
16 2	815	59 2	1,339	2 15	1,928	45 2	145	88 8	303
17 3	2,098	60 3	1,291	3 16	1,438	46 3	223	89寛政1	285
18 4	3,085	61寛文1	860	4宝永1	947	47 4	231	90 2	361
19 5	2,903	62 2	922	5 2	597	48寛延1	256	91 3	373
20 6	3,741	63 3	828	6 3	1,561	49 2	291	92 4	376
21 7	6,230	64 4	1,024	7 4	1,499	50 3	361	93 5	350
22 8	5,491	65 5	1,236	8 5	921	51宝暦1	280	94 6	286
23 9	6,000	66 6	1,292	9 6	733	52 2	290	95 7	273
24寛永1	正保4年	67 7	1,345	10 7	431	53 3	261	96 8	280
25 2	の火災に	68 8	1,134	11正徳1	(筋金55)	54 4	177	97 9	248
26 3	より11年	69 9	897	12 2	(焼金1)	55 5	289	98 10	222
27 4	まで記録	70 10	846	13 3	718	56 6	357	99 11	177
28 5	不詳。	71 11	965	14 4	1,731	57 7	304	1800 12	133
29 6	寛永3年	72 12	1,060	15 5	1,211	58 8	334	01享和1	263
30 7	に駿府へ	73延宝1	1,225	16享保1	1,148	59 9	359	2 2	170
31 8	5,000貫	74 2	1,479	17 2	1,319	60 10	234	3 3	116
32 9	江戸へ上	75 3	2,088	18 3	1,371	61 11	249	4文化1	109
33 10	納1,000	76 4	1,807	19 4	1,326	62 12	862	5 2	137
34 11	貫と見ゆ	77 5	2,228	20 5	624	63 13	270	6 3	124
35 12	1,992	78 6	1,503	21 6	621	64明和1	241	7 4	108
36 13	3,460	79 7	1,241	22 7	908	65 2	233	8 5	79
37 14	3,446	80 8	1,058	23 8	414	66 3	277	9 6	97
38 15	2,401	81天和1	1,077	24 9	591	67 4	252	10 7	97
39 16	不詳	82 2	853	25 10	416	68 5	252	11 8	68
40 17	不詳	83 3	813	26 11	409	69 6	348	12 9	62
41 18	2,037	84貞享1	750	27 12	504	70 7	284	13 10	57
42 19	1,701	85 2	1,120	28 13	389	71 8	541	14 11	78
43 20	1,372	86 3	1,119	29 14	339	72安永1	581	15 12	91
44正保1	1,536	87 4	685	30 15	378	73 2	546	16 13	80
45 2	不詳	88元禄1	921	31 16	340	74 3	557	17 14	109
46 3	1,318	89 2	699	32 17	322	75 4	539	18文政1	114
47 4	881	90 3	724	33 18	235	76 5	573	19 2	140
48慶安1	不詳	91 4	744	34 19	289	77 6	654	20 3	194
49 2	1,248	92 5	609	35 20	293	78 7	549	21 4	173
50 3	1,494	93 6	445	36元文1	261	79 8	482	22 5	192
51 4	1,488	94 7	520	37 2	308	80 9	399	23 6	260
52承応1	1,422	95 8	418	38 3	308	81天明1	448	24 7	226
53 2	1,421	96 9	642	39 4	305	82 2	649	25 8	249
54 3	1,201	97 10	830	40 5	277	83 3	608	26 9	187
55明暦1	1,167	98 11	932	41寛保1	227	84 4	666	27 10	218

年次	銀・灰吹銀	年次	銀・灰吹銀	年次	銀・灰吹銀	年次	銀・灰吹銀	
1828 文政 11	219	1838 天保 9	233	1848 嘉永 1	177	1858	5	185
29 12	247	39 10	207	49 2	183	59	6	176
30 天保 1	155	40 11	205	50 3	134	60 万延 1	1	168
31 2	223	41 12	213	51 4	154	61 文久 1	1	137
32 3	204	42 13	184	52 5	171	62	2	134
33 4	283	43 14	183	53 6	313	63	3	152
34 5	275	44 弘化 1	236	54 安政 1	233	64 元治 1	1	146
35 6	215	45 2	233	55 2	137	65 慶応 1	1	139
36 7	180	46 3	153	56 3	176	66	2	86
37 8	183	47 4	154	57 4	201	67	3	113

(注) 銀・灰吹銀のみとし、貫以下切捨てた。

(『佐渡金銀山の史的研究』田中圭一、刀水書房から)

●人物略記

○石江夏海（天明3年～嘉永1年／1783～1848）

相川生れ。南嶺や谷文晁に絵を学び、また司馬江漢に測量術、天文学、西洋画の技法を学ぶ。文化12年（1815）、佐渡奉行所絵図師に採用される。『佐渡地誌』の取調べや佐渡各地の絵図制作のいっぽう、孔子廟御普請取掛かりの仕事などをする。天保元年（1830）子息文海と「相川年中行事」を描いて奉行に献上、相川の町並みが極彩色ゆたかに描かれ、また西洋画技法の遠近法が用いられている。絵図師としてのみならず、俳諧歌、篆刻にもすぐれ、滝沢馬琴、式亭三馬、蜀山人などとも交遊があった。

○石谷清昌（正徳5年～天明2年／1715～1782）

紀州藩出身。享保18年（1732）本丸小納戸役、宝暦3年（1753）西丸目付側近役人。宝暦6年（1756）佐渡奉行、同9年勘定奉行、12年長崎奉行を兼ね、主に貿易・長崎関係を担当。南鐐二朱銀発行のための銀の輸入や輸出統制のための大坂銅座の設立、俵物増産に尽力。安永5年（1776）日光社参掛を勤め、朝廷経費節減などを行う。安永8年留守居、天明2年辞任。

○植田五之八（安政元年～明治44年／1854～1911）

上矢馳村（佐和田町）生れ。中興（金井町）植田家に養子に入る。明治12年、選ばれて新潟勸農場（近代農業の試験・研究並びに教育機関）に入学。明治15年に新設された佐渡三郡播種場場長に就任、各種農作物の試験栽培を行い、優良種苗の配布・普及に努めた。播種場が閉鎖されると私立の農事試験場を設立、それがやがて中興農事試験場として開設された。明治17年、直接に経営には携わらなかったが五之八が児玉長内や茅原鐵蔵らに呼びかけて佐渡牧畜会社が設立された。晩年の業績として特筆すべきことは、信用組合の設立と耕地整理事業である。日清・日露戦後は産業振興のため産業組合法が制定され、農民自身の力による振興策が推進されたものの、一般の農民には金融機関といえは頼母子講くらい。この状況下で五之八や本間長治などが集まって明治42年「金沢信用購買組合」が結成された。また五之八の奔走によって佐渡中央耕地整理組合が結成され国仲平野の耕地整理事業が急速に進んだ。

○（木食）^{もくじま}円空（寛永9年～元禄8年／1632～95）

美濃中島郡（岐阜県羽島市）生れ。若くして出家、天台宗の教義を学ぶ。修行のため寛文5年（1665）及び翌年東北・蝦夷地を巡ったのをはじめ、東日本を中心に行脚、各地で多数の木彫の仏像や神像を造立した。のみ目を残した自由奔放な彫りが特色、ユーモラスで親しみやすい。

○大江^{たけまつ}雄松（嘉永3年～大正6年／1850～1917）

新潟県北蒲原郡生れ。カトリック伝道士。新潟で貸人力車業を営んでいた頃、隣家のドルワール・ド・レゼーと議論したのがきっかけで受洗。以後、レゼーを助けて明

治11～16年兩津市夷町に居住、その間北陸伝道を行うが成果上がらず。明治16年夷町大火のため北蒲原に移り新発田を中心に多数の入信者を得る。大正5年春から再び佐渡伝道に努め、この地で没した。

○萩原重秀(万治1年～正徳3年/1658～1713)

延宝2年(1674)勘定衆に加わり、天領の検地や諸代官の検察に功績をあげ、貞享4年(1687)勘定吟味役、元禄3年(1690)佐渡奉行、同9年勘定奉行に昇進(兼務)。以後17年間この職にあって幕府財政を担当、貨幣の改鑄による財政窮乏打開を建議、改鑄による差額を幕府の益金(出目)とした。長崎貿易の代物替を増額して運上金を徴収したり、全国の酒造家に50%の運上金をかけるなど歳入の増加を図った。家宣の代に改鑄を行ったが、新井白石の三度にわたる弾劾で正徳2年(1712)失脚。佐渡では「殿様」と呼ばれている。相川町の本典寺に供養塔がある。

○奥平謙輔(天保12年～明治9年/1841～1876)

長州藩出身。藩校明倫館に入り居寮生となる。文久3年(1863)選鋒隊士として下関外国船砲撃に参加。慶応2年(1866)干城隊に入り、同3年討幕軍に加わり、明治元年(1868)越後・会津に転戦。同年11月新潟府管轄となった佐渡県を治める。同2年8月辞職して萩に帰る。佐渡にあっては、政治の中心となる役所を相川から河原田に移し、事務局を民政・金鉱採鍊・市郷・刑法の四局に分けたり、地役人の給禄を停止して田畑を与えることにし開墾に着手した。また政府にさきがけて戸籍の編成に着手したり、郷学校を開設して教育にも力入れている。このような改革の中で一番島民を驚かせたのは大規模な寺院の廃合(539カ寺→80カ寺)であった。同9年(1876)前原一誠と意気相投じ、10月「萩の乱」を起して敗れ、斬首された。

○おぐりまさか小栗美作(寛永3年～天和1年/1626～1681)

越後高田藩家老。鉱山、新田開発、用水工事など藩経済の発展に優れた手腕をふるったが、藩主松平光長の継嗣問題もからんだ家中の対立で、將軍綱吉によって子の掃部とともに切腹の判決をうけ自刃。光長は改易。

○河村瑞賢(元和3年～元禄12年/1617～1699)

伊勢(三重)出身。明暦3年(1657)江戸大火に際して木曾の材木を買占め、一大富豪となる。のち、幕命を受け東北の物資を迅速に大坂、江戸に運ぶための奥州航路、いわゆる東回り航路と西回り航路を開拓。また、安治川、淀川、長柄川、中津川などの治水事業を行なった。延宝2年(1674)高田藩に招かれ中江用水建設、郷津湾築港、銀山開発などを行なった。

○木食行道（享保3年～文化7年／1718～1810）

茨城の真言僧、木食観海から木食戒を受けたので弾誓上人とは直接の関係はないものの諸国巡礼を発心し、出立。天明元年に来島、四年間滞在し、その間弾誓が修行した檀特山の釈迦堂や真更川山居の光明仏寺を再建。地藏菩薩（相川町石名、清水寺）などたくさんのお像や掛額などを残した。

○教如（永禄1年～慶長19年／1558～1614）

本願寺12世、東本願寺初世。父は11世顯如。天正8年（1580）、石山合戦（信長と石山本願寺顯如との合戦、1570～）の和議がなり、顯如は紀伊に、教如も籠城半年で雑賀に退いた。天正19年（1591）顯如は秀吉から京都堀川の地を得て本願寺（西本願寺）を再興。その没後に12世を継ぐが、文禄2年（1593）秀吉の命により弟准如に譲る。慶長7年（1602）家康から京都烏丸に寺地を得て東本願寺を興した。

○近藤福雄（明治33年～昭和32年／1900～1957）

金沢村（金井町）大和田生れ。佐渡の風俗を撮りつづけた異色の写真家。若い頃彼に大きな影響を与えた人物に母方の祖父茅原織蔵と川上喚濤がいる。福雄が初めて写真機を手にしたのが大正7年、18才のとき。近所のおばさんや緑日の風景などなんでも写した。その後、来島した徳富蘇峰、牧野富太郎、本田正次、大町桂月など異なった分野の知名人を案内・撮影し、それぞれ物の見方を学んだ。昭和27年「千種遺跡」の発掘に参加、土器の記録に執念を燃やし佐渡博物館の初代考古部長に就いた。終生自分のやりたいことにこだわり続けた。写真集『佐渡写真帖』がある。

○種田山頭火（明治15年～昭和15年／1882～1940）

大正・昭和期の俳人。山口県生れ。大正2年（1913）萩原井泉水に師事、自由律の俳句誌「層雲」で活躍。種田家破産ののち、大正14年（1925）熊本市の曹洞宗報恩寺で出家得度。以来、行乞放浪の旅にあつて句作を続けた。

○木食弾誓（天文20年～慶長18年／1551～1613）

尾張国海部郡生れ。永禄6年（1563）美濃国国府の観音堂、のち同国武儀の本地師の村の草堂に入り、合わせ23年ひたすら念仏修行したという。その後、近江の守山、京、摂津、一谷の古戦場を訪れ、合戦で亡くなった人々の霊を慰め、さらにその昔一遍上人のこもった熊野の本宮証誠殿にこもり一所不在の行者となり遊行の旅に出立。摂津国加古の津から（といわれている）弟子の但唱と佐渡に渡り相川に住んだが、乞食姿であった。河原田（佐和田町）の常念寺で得度したものの修行にあきたらず、外海府（相川町）の檀特山にのぼって木食戒の荒修行を行った。そして慶長9年（1604）悟りを開いたとされる。その後長野や神奈川を巡り木食宗をおこし、京都大原に古知谷阿弥陀寺を建てている。岩谷口（相川町）の洞窟（弾誓の住居）の入口上部に弾誓上人の「南無阿弥陀仏」の名号が彫られている。

○木食但唱（天正7年～寛永18年／1579～1641）

摂津国の人で、有馬温泉薬師堂の薬師如来の申し子だといわれる。彈誓と一緒に佐渡に渡り、慶長11年一緒に去る。その後、彈誓上人は越後米山で作仏修行、但唱は信州の虫蔵山^{むぐら}で修行。彈誓に呼び寄せられ、秘授口伝により「念来称帰命山」の法号を与えられる。寛永12年（1635）江戸高輪に大日堂を建立、「帰命山如来寺大日堂」と名付ける。帰命山とは山に帰依するという意味。翌年、信州伊那で作った五智如来を江戸に運び將軍秀忠の供養に供したことから天海僧正と接触、融通念仏弘通の朱印状を得て中央の宗教界に躍り出た。

○ドルワール・ド・レゼー（1849（嘉永2年）～1930（昭和5年））

北フランスのダンケルクに生る。1873年（明治6）司祭となり、9月来日。東京神田猿樂町にあった神学校付属の聖堂（神田教会）を経て、明治8年（1875）新潟で布教。当時佐渡は巡回布教地であった。そのほか北陸各地に伝道旅行した。仙台、松本、甲府等の教会を経て明治30年（1897）東京関口教会主任司祭となる。この間、『公教雑誌』の創刊・編纂のほか、神学、護教、信心書など多数の著述をなした。大正7年（1918）神山復生病院院長となり、多年ハンセン病患者の慈父として救済に尽くした。

○茅原鐵藏（嘉永2年～昭和6年／1849～1931）

大和田村（金井町）生れ。長じて小学校教員助手となるが34歳のとき発心して農商務省の農書編纂委員織田完之について農学を修め、それが牧畜会社設立などに実現する。帰島して地方農談会を組織、農業改良の大切さを説く。明治18年（1885）東京駒場の農科大学に入り農事実習に励み、鋤などを改良。19年には佐渡で最初の農産物品評会を、相川で水陸物産共進会を開催して島人の視野の拡大に尽力した。了寛に請われて『北溟雑誌』の社主となる。23年の内国勸業博覧会には郡代表として出品、宮内省御買上げとなる。同年農商務省の横井時敬博士のすすめにより実地経験家の指導を受けるため一年余り全国を回るといふ又とない機会を得た。そして島に帰ると佐渡各地をまわって、産業の振興と二宮尊徳の報徳精神や儉約貯蓄の普及などにつとめた。また民俗学者柳田国男の主宰する『郷土研究』への投稿の常連でもあった。

○土田麦僊（明治20年～昭和11年／1887～1936）

新穂村生れ。日本画家竹内栖鳳の弟子。大正7年（1918）国画創作協会を設立。帝国美術院会員。「大原女」、「舞妓」は絢爛な桃山芸術の復興といわれる。哲学者土田杏村は実弟。佐渡博物館に「常設展」がある。兄弟の生家（新穂村井内）は現在無いが、「麦僊・杏村記念碑」が同村上新穂にある。兄弟の墓は京都智積院にある。

○本間琢斎（初代）（文化6年～明治24年／1809～1890）

柏崎市大久保生れ。天保年間に来島、佐渡佐和田町五十里^{いかり}竈町の本間家の養子となる。弘化4年（1847）佐久間象山の指導で大砲を弟良助らの協力を得て鑄造、佐渡奉行所に納めた。明治初頭、本格的に蠟型鑄金に取組む。明治5年斑紫銅の技術を

開発、翌年オーストリアの万博に出品。佐渡銅器の名声を一挙に挙げた。

○三浦常山(榎) (天保7年～明治36年／1836～1903)

相川町生れ。陶芸家。明治9年(1876)、それまで実用にならなかった無名異^{むなよひ}焼を高温焼成により硬質の美術品に改良し、私営「常山窯」を起し量産化を志す。作品に「祥朱泥草花象嵌茶注」などがある。伊藤赤水も前後して高温焼成の無名異焼に成功している。「無名異」とは中国の漢方薬に由来するといわれる。

○^{みなみ}南方熊楠(慶応3年～昭和16年／1867～1941)

紀伊生れ。植物学者、民俗学者。生物学を研究しながら中南米各地を放浪。明治25年(1892)天文学論文が認められ大英博物館東洋調査部勤務となる。十数カ国語に通じ、イギリスの専門誌に多数の論文を寄稿。明治33年(1900)に帰国、和歌山県田辺市に定住し、菌類や民俗学の研究を続け、特に粘菌類の研究は世界的に評価された。明治39年(1906)の神社合祀に反発して反対運動を続けた。

(参考文献)

『日本史広辞典』(山川出版社)、『金井を創った百人』(金井町)、『日本キリスト教歴史大事典』(教文館)、『新潟県人』(新人物往来社)、『佐渡の歴史』(郷土出版社)、『ものがたり日本列島に生きた人たち』(岩波書店)、『第6回全国天領ゼミナール記録集』(金井町)

○郷土史研究会講演リスト（○数字は所収番号を示す）

- 第1回 「先駆ける群像」 H2.2.4（田中圭一先生）
- 2回 「思い出すままに」 2.6.3（中川 融先生）
- 3回 「佐渡の木喰と地藏信仰」 2.10.7（田中先生、以下同じ）
- 4回 「佐渡の名字—そこから考えられるもの」 3.7.7
- 5回 「金山は島に何を与えたか—佐渡文化論」 3.11.10
- 6回 「能登と佐渡の間」 4.6.21 ②
- 7回 「明治の佐渡—内側を見た人、外で働いた人」 4.10.18
- 8回 「蘭学者 柴田収蔵」 5.2.21 ③
- 9回 「大久保長安と佐渡」 5.11.14
- 10回 「流人 京極為兼の周辺」 6.5.22 ②
- 11回 「良寛の実像」 6.11.27
- 12回 「回船商人 舟登源兵衛（岩谷口）の夢」 7.6.17 ④
（改題：「船と佐渡文化」）
- 13回 「江戸時代の商業と流通」 7.12.10 ④
- 14回 「佐渡の中世—日蓮上人配流とその周辺」 8.5.11 ①
- 15回 「佐渡おけさと相川音頭」 8.11.10 ①
- 16回 「世阿弥の頃の佐渡」 9.5.25 ①
- 17回 「十八世紀・佐渡を動かした人々」 9.11.8 ②
- 18回 「北一輝と佐渡の明治」 10.5.30 ④
- 19回 「千歯せんばこき—氏江市郎兵衛の話」 10.10.31 ③
- 20回 「佐渡人氣質はどこから来たか」 11.5.29 ③
- 21回 「木 喰」 11.11.27
- 22回 「遍照坊智専へんしょうぼう」 12.6.3 ⑤
- 23回 「北溟雑誌と本荘了寛」 12.11.5 ⑤
- 24回 「佐渡金銀山と鎖国」 13.5.27 ⑤
- 25回 「長谷川元良と竹中成憲」 13.11.18
- 26回 「良寛伝記の世相—幕末、明治・佐渡の科学者たち—」 14.5.19
- 27回 「『佐渡四民風俗』の世界」 14.11.30